



安達文夫・鈴木卓治・小島道裕・高橋一樹

はじめに

①情報資源共有化システムの概要

②マッピング方法

③システム構成

④実証システムによる評価

むすび

[論文要旨]

人文科学の分野において、様々なデータベースが作成され、多くがネットワークを介して公開されている。これらのデータベースをまとめて検索できるようにすることにより、個別のデータベースの所在やその操作方法を意識することなく検索が可能となる。

総合研究大学院大学の文化科学系の基盤機関と幾つかの大学とが共同し、各々の機関が有するデータベースを統合的に検索できるシステムの研究を進めている。この統合的な検索を実現するための一連の共通の窓として Dublin Core と呼ばれるメタデータを選択している。これに、国立歴史民俗博物館の「館蔵資料データベース」と「館蔵中世古文書データベース」のデータ項目をマッピングする方法について検討し、実証システムにより評価を行った。

ネットワーク上の資源の記述を本来の目的としたメタデータである Dublin Core に、資料の目録情報からなるデータ項目を一応の根拠をもって対応付けができる。しかし、資料の形状、状態、材質といった実際のものが持つ属性では、その意味の捉え方によって、対応付ける先にゆれが残る。また、ユーザインタフェース上、エレメントの名称を直接的に検索語の入力欄に表記したのでは、実際に対応付けられているデータの内容とかけ離れる場合が生ずる。エレメントの定義や名称を適正化する必要があることが、実証実験により確認された。検索結果の表示方法の評価から、表示するデータ項目や名称の表示方法の検討が必要であり、統合検索と個別検索の役割の整理が重要な課題であることが示された。また、多数のデータベースを対象とすることから、検索結果の表示と絞り込みに関するユーザインタフェースの面で新たな考慮が求められることが明らかとなった。